2017年10月16日 入寮早祷 (担当平松)

輪読箇所: 創生記 25:19-34

賛美歌: 139番「うつりゆく世にもかわらで立てる」(原題: キリストの十字架)

聖書の引用:

[ガラテヤの信徒への手紙6章14節]

私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。

[マタイの福音書 5章17節]

私が来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するためにきたのです。

-----------------------------------------------------

早天祈祷会の流れ

①賛美歌

②お祈り (即興で作文できないので原稿を作っておきます)

神様、感謝してお祈りします。

今日も新しい朝を迎えられましたことを感謝します。

康さんが東北で無事に帰って来られましたことを感謝します。

新しい舎生に成長の機会を与えてくださり、ありがとうございます。

今日から一週間が始まりますが、我々が健康を保ち、学業に専念できるように見守ってください。

アーメン

③静まる時間

④メッセージ

⑤主の祈り

天にまします我らの父よ  
願わくは  
御名をあがめさせ給え  
御国を来たらせ給え  
御心の天に成る如く地にもなさせ給え  
我等の日用の糧を今日も与え給え  
我等に罪を犯す者を我らが赦す如く我らの罪をも赦し給え  
我等を試みに遭わせず悪より救い出し給え  
国と力と栄えとは限りなく汝のものなれば成り

アーメン

-----------------------------------------------------

[メッセージ の原稿]

おはようございます。今日は僕が入寮して一ヶ月くらいたって、はじめて早天祈祷会を担当する日です。まず簡単な自己紹介をします。

僕の名前は平松です。工学部の物理工学科で物理学を勉強しています。学部３年です。東大に来る前は富山高専というところで電気工学と機械工学を勉強していて、高専を卒業したあと東大に編入しました。今学部4年の吉田くんと同時に入学しましたが、僕がインターンで１年間休学していたので吉田くんに比べて僕の学年は一年下です。趣味は散歩と本を読むことと、運動することだと思います。マンドリンという楽器を弾くサークルに所属していますが、演奏会の時期の前だけ顔をだす幽霊部員です。

僕は両親がクリスチャンの家に生まれて、小中学生のころはキリスト集会に通っていました。でも寮に入る前は(今もですが)、聖書の内容とクリスチャンとしての生活については断片的な知識しかありませんでした。この寮に入ってからは、信仰とキリスト教に関しても考える機会が持てて、僕がいかに理解していないか、不信仰か分かるようになりました。ヘロルさんがこの寮を出られるときに言われた表現が、僕の印象にのこっています。ヘロルさんが言ったのは、「信仰を持って救われるためには３つのステップがある」ということです。「正しい知識を持つこと、納得すること、主を信頼することが信仰へのみちだ」と言ったと僕は記憶しています。僕はこの表現に納得しました。どこに納得したかと言うと、信仰を深めるために順番があるということです。つまりステップ１の知識のない人間が、ステップ３での主イエスをほんとうに信頼することはできないということです。

僕がヘロルさんのお話から考えたのは、本当に信仰を持つためには正しい知識がまず前提だということです。でも僕は聖書を見ても疑問をたくさんもってしまいますし、牧師さんのお話を聞いても分からないところが多かったんですね。どうやって勉強すればいいか悩みました。そのときある物理学者の方が僕に内村鑑三の本を読むように勧めてくれたことを思い出しました。そこで、内村鑑三の「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」を読んでみました。

この本は名前の通り、内村鑑三がどうやってクリスチャンになったかを書いた本です。もともと儒教(と仏教と神道)の影響の強い武士の家に生まれた内村さんが、自分のバックグラウンドや職業と折り合いをつけながら、どうやってクリスチャンになったかを時系列にそって書いてあります。僕はその本の最後の10章の前半に良いことが書いてあると思ったので、内村鑑三が10章の前半で何を言って、僕が何を感じたかお話します。

簡潔に言ってしまえば僕が理解した10章の内村の考えの中心は、「純粋にして単純なキリスト教と、そのほか(教授たちによりかざられ教義化したキリスト教)をはっきりと区別して考えることが必要なときがある」です。例えば、内村は本文中で、「キリスト教国(内村にとってアメリカ)を正しく理解するためには、純粋で単純なキリスト教とそうでないもの(教授たちに権威づけられたもの; 神殿、教会)を区別することが最も重要である」と言いました。これに近いことは本文中でも表現を変えて、繰り返し述べられていると思います。僕は、純粋なキリスト教とそのほかを区別することは、僕がキリスト教を勉強するうえでも重要なことだと思いました。これが今日の話の中心です。

では純粋で単純なキリスト教(で大切なこと)は一体なにかと言うと、内村は少なくともふたつの考えを引用して説明しています。ひとつ目は、賛美歌うつりゆく世にもかわらで立てる(139番)です。この賛美歌はしらべてみると、御言葉のガラテヤの信徒への手紙6章14節に影響を受けたものだそうです。この御言葉は、「私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。(後略)」です。内村さんは『神の子の贖罪の恩恵による罪からの開放、キリスト教はこれ以上のものかもしれませんが、これ以下のものではありません。これが本質です。私にとってはそうです。』と言いました。これが内村さんの考えるキリスト教の大切なところだと思います。もうひとつ内村さんが引用したのはグラッドストーンさんのキリスト教の定義です。ある本(論文?)のなかでキリスト教とは「神の存在を示して、僕達に神との生き生きとしたつながりを持たせるもの(後略)」であるとグラッドストーンは言ったそうです。僕はこれらから、僕は経験と能力がなくて、本当の意味ではこれらの意味を理解していないと思いますが、十字架にかかった主イエスと神が存在して、僕たちが神といきいきとつながることがキリスト教の核心だと解釈しました。

メモ: 内村さんは同時にキリスト教を定義することは難しい(不可能)と言っています。例えば「まことに我々が言うことができるのはキリスト教が何かではなく、何でないかだ」と言っています。

とにかく、キリスト教の本質とそうじゃないことがあると内村さんは言って、それらを区別することがが重要なときがあると。これが僕がこの本から受けた大きなメッセージでした。もしかしたら誤解されているかたもいらっしゃるかもしれませんが、内村は教会だったりが必要ないということはこの本の中からは言っていないように思います。言ったのは、「大切なこととそうじゃないことを分けて考える必要があるときがある」ということです。示してくれたのは、「キリスト教を学ぶ上で大切なことと、そうじゃないことがある。」ということです。

その他にも、聖書の勉強の仕方について、いくつか納得できることが書いてありました。紹介します。

まず聖書に関してです。内村さんは「キリスト教の大部分とその本質が含まれているにしても、キリスト教は聖書そのものではない。」と言いました。みなさんにとっては常識だったかもしれませんが、僕ははじめて納得できました。

信仰に至るまでのみちについても内村さんはこう言っています。「手段や方法(環境)により改宗させられたものは、同じような手段や方法によって異教徒に戻すことができる。」内村さんは「かえって私は自分が異教徒の立場(バックグラウンド)にあることを特権と思い、神に感謝しました。」と言っています。僕の解釈ですが、裏を返せば、自分の頭で悩んで考えて信仰に至ったなら、その信仰は簡単には揺るがない。僕も本当の意味でのキリスト教の教育を受けて来なかったからこそ、むしろ(他の人とは違った/簡単には揺るがない/深い)理解に至ることができるのかもしれないと思いました。

つぎに他宗教との関係です。内村さんは、キリスト教を世界10大宗教のうちの一つに数えています。他の宗教を邪教(間違っている)として切り捨てることはしません。他の宗教も道や律法を示しているという点ではキリスト教と共通しています。ただ、キリスト教が優れているのは、「内面から働きかけて律法を守ることを可能にしている。道だけではなく生命を与える。」ところだと言いました。本文ではマタイの福音書 5章17節を参照します。「私が来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するためにきたのです。 」内村さんはキリスト教をこう例えました:「 正しい生き方をするためにレールを敷いてくれて、エンジンを与えてくれる 。」確かに道を守ることは僕にとってとてもむずかしいことなので、守るための力をあたえてくださるのは素晴らしくありがたいだと思いました。

メモ: 確かに例えば儒学(僕は宗教と捉えていないけど)の道は、守るのは難しい。たとえば鑑三の名前は一日に三回自分を反省するの意味。論語で述べられている曾子(孔子の門人)の言葉「私は一日に三回わが身について反省する。人のために考えてあげてまごころからできなかったのではないか。友達と交際して誠実でなかったのではないか。よくおさらいもしないことを(受けいりで)人に教えたのではないかと。｣にちなむと僕は考える。この言葉を守ることは僕には不可能に思えるくらい難しいことだ。

さらに内村さんは「キリスト信徒にとって知る必要のないものはない」と言いました。これはとっても自由な(リベラルな)考えだと思います。例えば学問に関する姿勢、時代の流れに関しては儒学で多くのことが語られていると僕は思いますし、これはキリスト教では強調していないことだと思います。

まとめます(後半は無視します)。信仰に至るためには知識が必要です。知識を得るときには、キリスト教でなにが大切なところかを考えることが重要です。

内村鑑三という人間を僕が尊敬しているところをお話します: 誠実であるところ。自分を理想的な人間に高めるために、喜んでクリスチャンになっているところ。情熱的であるところ。うがった考えについても省みて自分の理解を深めているところ。文章にまとめて自分の考えを発表しているところ。僕は内村さんの「僕はいかにしてキリスト信者になったか」を読む前は彼のことをよくしりませんでしたが、本を読んだあと、(なかなか成し遂げることが難しいことをやり遂げたという点で)彼はエライと思いました。彼のような誠実さは、僕の目標の一人にしたいと思いました。

(もし時間があれば) 僕が通っている吉祥寺集会に関してお話しておきます。全国50箇所以上くらいで毎週集会が持たれています。集会所を持っている支部はあまりなくて、例えば僕の地元富山集会では毎週日曜に5時間くらい公共の会議室を借りて集会をしていました。形式的な特徴としては、牧師がいないことと持ってる不動産の数が(おそらく)少ないことから、完全な自由献金を達成できていることが挙げられます。また「主の祈り」の僕は今日お話した内村さんの影響で広まった「無教会派」と吉祥寺キリスト集会は(すくなくとも牧師を持っていないということで形式が)似ていると思います。吉祥寺集会の方で平さんという僕の小さい時を知っているかたがいらっしゃいます。僕がYMCA寮に入ったことを報告すると開口一番「イエス様が全てだよ」といいました。いろいろな行事があって、尊敬できる人がいて、もしかしたらそうじゃ無い人がいるかもしれないけど、最も大切なのは神様との(毎日の/不断の)つながりだよと言いたかったんだろうと思います。

僕が最後に吉祥寺集会について触れたのは、教会との比較をするためではありません。僕が内村さんの本から受け取ったメッセージは、教会に行くか集会に行くかなどの形式的なところではありません。

吉祥寺集会に関するメモ: ウォッチマン・ニーの伝道の方法に影響を受けたゴットホルド・ベック宣教師が中心となって1964年に吉祥寺集会を発足しました。そのときにベックさんは一般の信徒になったそうです。ベックさんは去年亡くなりました。

今日の早天祈祷会のメッセージを振り返ります。僕はこの機会を通じて、内村鑑三の『我はいかにしてキリスト信徒となりしか』について合わせて4回考えました。まず通読して1回、9章と10章を紙にまとめて1回、発表の準備で1回、この場で1回。僕のキリスト教への理解は大幅に高くなりました。今後も、僕が担当する早天祈祷会の機会を借りて僕の理解を高めることができれば嬉しいです。またみなさんにとっても普段考えないことを考えるきっかけになればと思います。

今日から一週間が始まります。よい一週間を。

(質問やフィードバックなどがあればお願いします。)

参加者: